

藤中 寛之

「おいちゃんは、こう思う」「え、でも、そうじゃないの」と、なんの変哲もない街はずれのバー「上海ノオト」は混とんとしていた。私も含めた3人の客は、取り壊される予定の折尾駅舎の保存活用について、毎日のように話し合っていたのだ。だが、どうも展望が開けない。

「まずは、自分たちが楽しもうぜ」と、店主の江島さん。手際よく氷をかち割りながら、自信ありげにほほ笑んだ。「3日後ですよ、堀川うたまつり。江島さん、出演者もほとんど決まっていけないのに、大丈夫ですか」と、事務局を任されることになった私。

「まあ、バンド仲間に声をかけているから、なんとかなるさ。周辺のお店には、おいちゃんが了解をとってくれるし、心配ないよ。当日、早めに現地に行ってまつりのコンセプトを2人でつくろう」と、江島さんは折尾駅付近の角打ちを2軒はしごすと言い出した。

まつり当日（7月16日）、じりじりと肌を焼くような日差し。江島さんと私は汗を拭きながら、キューと角打ちのビールを飲み干した。戦前に角打ちに嫁いできたおばあちゃんが、製鐵と炭鉱の労働者でこた返した当時の堀川付近の様子を語ってくれた。

ほろ酔い気分になりかけた頃、角打ちの座敷に移って2時間後に迫ったまつりのコンセプトを検討した。「出会い」は、まつりの核心だけど、当然なので書かなくていい。折尾駅舎の保存の必要性は、こだわりのテーマだけど、あえて書かないでおこう。それよりも、折尾の特性、「歴史と文化のクロスロード」を前面に打ち出し、皆さん一人一人と共に楽しい空間にすることを提起しよう、ということになった。

会場に戻ると、すでに江島さんのバンド仲間が音響機材を設営しており、近所のお店の方々がビールやお茶を差し入れしてくれた。前半ステージは、ポップなミュージックとハードロックが続き、60代女性ダンサーの飛び入り参加もあって、観客から声援が飛び交った。

夕暮れと共に、山笠の威勢のよい掛け声と太鼓の音が近づき、まつりはヒートアップしていった。電飾で飾られた山笠が会場を所狭しと激しく回転し、大歓声が沸き起こったのである。

打って変わって後半ステージは、都会のおしゃれなクラブの生演奏のようなバンドが続き、色気のある大人の世界を演出した。私は、堀川沿いは労働者の街としての活力ある雑多なイメージと共に、学術研究都市としての落ち着いた面持ちも打ち出せるのではないかと夢が膨らんだ。

最後に、江島さんがマイクを握り、物静かに、だけど力強く「折尾駅舎を残したいと思う。駅舎がなくなると、自分でなくなるし、折尾でなくなるよ」と言ってビールをあおった。

私は、まつりの楽しい空間の中に、いつの間にか地域について主体的に考える混とんとした住民の輪が、広がっているように感じた。

7月13日、今年で7年目となる地域通貨オリオンの地域交流会が、折尾東市民センターで開催された。大学生17名、地域の方々8名が参加し、人と人をつなぐ役目を果たすオリオンの説明や自己紹介、意見交換などが行われた。

地域の方々が一品ずつ持ち寄った、とっても美味しいコロケや赤飯などを食べながら、大学生が「できること」と地域の方々が「してほしいこと」について、わいわい話し合った。例えば、堀川のイベントや清掃、庭の剪定のボランティアなどが話題となった。また、大学生から「将来、小学校教員になりたいので、子どもと触れ合えるボランティアがしたい」との要望があり、地域の方々から「夢に向かって頑張れ」との温かい声援を受けていた。（藤中）